

## 〈二月革命〉と文学の挫折（Ⅱ）

—ポスト・ロマン派作家たちの存在論的＝歴史状況（中）—

柴田芳幸

La Révolution de février et l'échec de la littérature (II)

— La Situation historico-ontologique des écrivains post-romantiques —

Yoshiyuki SHIBATA

主として神殺しに関する存在論的分析によって特徴づけられる『マラルメのアンガジュマン』の第一部は、王の殺害に導く〈フランス大革命〉や王政の失墜に至る〈二月革命〉によって権力に辿り着いた中産階級——一八五〇年の詩人たちの社会階層——の社会的＝歴史的分析を含んでいる。それゆえ以下は、サルトルにおけるマルクス主義的観点である。

中産階級はちょうど自らの君主と神とを失ったときに、分派同士の競合の背後に、階級闘争をかいま見ている。<sup>1)</sup>

言い換えれば、中産階級は己のおぞましい使命を発見する。つまり貴族階級を抹殺し、次に自己消滅して、己の死から無産者階級が誕生するという。中産階級とは時間においても空間においても中間の階級に他ならない。

しかしながら、サルトルによれば、流動的で過渡的なこの階級は、自己確立するために自己否定する——「中産階級は存在しない、一度も存在したことはない」——、なぜなら被圧制者たちに圧制者はいないと説得するのが問題なのだから。それゆえサルトルはこう書く。

中産階級は自らの真実の中に自己を認識することを拒否する。そうすれば鏡の中に死を見るであろう。それは、階級なき社会の名において、己が貴族階級の廃滅を引き受けた階級であったということを感じることが、知りたくはない。この未来の社会は、〔中産階級にとって〕自らの終わりにして崩壊、自らの存在理由にして否定なのだ。<sup>2)</sup>

知への渴望であると同時に非＝知への深い欲望である、支配階級のこの両義的な精神の態度、サルトルはそれを、『家の馬鹿息子』第三巻の「取り戻された読者」と題された節で、偽意識と呼んでいる。

階級のすべての個人に共通のこの偽意識——さまざまな思考のこのフィルター——、それは、彼らが自分たちの階級をそのまま真に意識化するのが不可能であることから生じ、そしてその目的論的意図はこの自覚を不可能にすることにある。<sup>3)</sup>

それでそれ自体において矛盾した欲求としての自己自身についての偽意識を宣告された中産階級は、己の思考形態を科学主義の中に見出すだけに甘んじる。

ルイ＝フィリップ治下での、そしてさらにナポレオン三世治下での、中産階級の思考形態の基本構造は、支配階級の必要をかなえるために、真の科学的知識に基づいて打ちたてられた学理的非＝知に他ならぬ科学主義……であるにちがいない。<sup>4)</sup>

というのは、一八五〇～七〇年の期間——その間、「第一次産業革命」が生まれ、成長し、確立されるのが見られる——「フランス経営者の暫定的な思考形態」<sup>5)</sup>として指定される科学主義的思考体系は、必要不可欠な道具としてその恐るべき分析力を有しているのだから。一言でいえば、科学主義の＜分析的理性＞が中産階級に、「階級＝の＝存在に対する腐食性の武器」<sup>6)</sup>として役立つたのである。

こんな風にして「階級が抹殺され」<sup>7)</sup>、そしてそれ以来、自由契約は個人間で、すなわち別個の社会的原子間で締結されねばならない。つまり諸個人と国家のあいだに中間の集団はない。「労働者階級を粉碎せよ。」<sup>8)</sup> こうして『＜未定稿＞＝マラルメ』においてサルトルは、知られざる階級の『神話作用』（バルト）を非神話化〔暴露〕する。「中産階級全体が＜秘術的権力＞なのである。」<sup>9)</sup>

だがその反面、科学は中産階級にとってさえ危険である、なぜならそれは教育の進歩によって、あらゆる序列〔階層制〕の客観的原理や不平等の否定的原理を破産させるのだから。その結果、「不安定で矛盾した産物であり、できれば歴史を止めたいと望んでいる過渡期」<sup>10)</sup>に他ならぬ中産階級は、貴族階級に対しては万人の平等を、そして無産者階級に対しては自らの生来の優越を断言することになる。これこそが実際、分析精神の帰結なのだ。サルトルはこうして中産階級の意図を見抜く。

中産階級は、一七八九年〔フランス大革命〕の偉大な敗者である総合の精神を自らのために取り戻し、そしてその還元不可能な産物を回復させない限り、普遍的等価性の中に消え失せるだろう。<sup>11)</sup>

サルトルによれば、ここで問題になっているのは、「貴族階級を復元すること」<sup>12)</sup>なのである。というのは中産階級は諸階級を否定すると同時に、労働者たちには、さまざまな魂の序列、一言でいえば複数の人間的本性が、つまり機転、センス、繊細の精神、等があるということを示唆したいのだから。要するに、一八五〇年の中産階級が必要としているのは、防御反応としての「プレシオジテ」<sup>13)</sup>〔言葉や物腰の洗練を競ったフランス十七世紀の風潮〕なのである。そして中産階級における貴族主義的精神のこの現存は、その平等主義的言明の裏面に他ならない。このブルジョワ的善悪二元論は「品位」<sup>14)</sup>の名で知られている。

さて、「取り戻された読者」の歴史的分析において、サルトルは、一八四八年六月〔の虐殺〕に基づいた「新ヒューマニズム」——反神で反自然のブルジョワ的偽ヒューマニズム——そしてその基盤は逆説的に、もっとも徹底的な人間嫌い以外ではありえない「新ヒューマニズム」のその実践をこう敷衍する。

たしかに、ブルジョワ〔資産家〕や有識者、要するに教養人たちに直面すると、彼ら（労働者たち）は純然たる自然を象徴する。人間的な自然〔本性〕ではなくて、その純然たる非人間性における動物的自然〔本性〕である。もちろん、品位……とは実践である。だがその意味は、自然の純然たる否定としての文化を構成することだ。……彼（卓越シタヒト）が、自らの服装によって、その衣服が彼に加える激しい苦痛によって、自分に強いる頑強な首かせのおぞましい醜さによって、生理的欲求が彼に吹き込む嫌悪感によって、また彼がそれらの欲求に対して行使する抑圧的な慣行によって、自分自身の体を虐待しながら、新ヒューマニズムに基盤として役立つにちがいないこの模範的な自己嫌悪を表明するとき、彼が自分自身の中で憎んでいるのは労働者なのである。<sup>15)</sup>

一八五〇年の中産階級が下層階級から自らを「区別し」たいと思うのと同様に、聖なる靈感の消滅のせいで見者でも予言者でもありえないポスト・ロマン派の一八五〇年の詩人たちは、この文化的品位〔卓越〕、「プレシオジテ」によって、中産階級から自らを「区別し」たいと思うのである。彼らはそれで美の〈幻の貴族階級〉を復興するだろう。

詩は自らの内に新しい使命を発見する。詩は〈真理〉に対抗して、〈幻の貴族階級〉を再構成するだろう。〈科学〉の〈公然の真理〉と向き合って、詩は伝達不可能性の騎士団を確立するだろう。詩は美を、選抜原理のように用いるだろう。<sup>16)</sup>

というのは一見したところ皆に与えられているが、実際には少数の特権者たちに接近可能な美は、人間たちを識別し、そして社会の中にレベルの断絶を産み出すのである。その結果、「数十年間、詩人たちは詩人たちとしかつきあわなかった。ルコント・ド・リールの家では、どの入会式にもミ

サの厳肅さがあつた。そこでは厳格な序列が保たれていた。ヴィクトール・ユゴーは囚われの王であり、ルコント・ド・リールは副王であつた。内輪では進んで、王子、公爵または元帥と互いに呼びあつていた。」<sup>17)</sup>

彼らのまったく否定的な貴族階級は、現実のあらゆる貴族階級の廢墟の上にそびえ立つ。「一八五一年に詩が被つた挫折」<sup>18)</sup> (小ナポレオンの十二月二日のクーデター後、〈父〉ユゴーの流謫＝敗北によって象徴される〈詩〉の死)と「一七九三年にフランスの貴族層が受けた大敗北」<sup>19)</sup> (一七九三年一月二十一日、ルイ十六世の処刑によって表象される〈旧体制〉の〈貴族階級〉の死)とは互いに反映し合い、そしてどちらの敗北も「一つの形而上学的ドラマ」<sup>20)</sup> (神の死)の地上的イメージなのである。こうして私たちは、サルトルにおいては、階級闘争というマルクス主義的概念によって特徴づけられる社会的＝歴史的水準が、死という実存主義的觀念に立脚する存在論的水準に、合流するのを見ることができる。

ところで『家の馬鹿息子』第三巻の、とりわけ〈第二編〉「フローベールにおける神経症とプログラム作成——〈第二帝政〉」において、サルトルが「〈貴族階級〉の死」<sup>21)</sup>——その上に一八五〇年のブルジョワ＝作家たちの高踏派的序列がそびえ立つ——というこのテーマを詳説しているのに注目すべきであろう。そこで「二つの貴族階級」(〈旧体制〉下のいわゆる武家貴族と〈第二帝政〉下の不可能な貴族)について論じながら、サルトルはそれらを、ギュスターヴ・フローベールのようなポスト・ロマン派の〈虚無の騎士〉に固有な「二種類の〈非＝存在〉」とみなしている。

これらの二つの虚無は互いに補強し合っている。本物の貴族のもう＝存在し＝ないは——その貴族が非＝存在を死後の生〔不死〕として生きる限りにおいて——〈帝政〉の貴族の存在し＝ないに、非本物性におけるある程度の内実を可能にする。……偽の貴族と眞の貴族は、それらが人間の人間への自由裁量権〔絶大な力〕、すなわち〈悪〉を、そしてきわめて間接的には〈美〉を具現している、という共通性がある。<sup>22)</sup>

存在論的分析(神の死)によってと同時に歴史的分析(階級闘争)によつても注目される『マルメのアンガジュマン』第一部は、下層中産階級の出身である一八五〇年の詩人たちのもう一つの社会学的分析を含んでいる。つまり彼らの唄〔詩〕によつて自己表現しようとしているのは中流階級の下層なのである。一八五一年のクーデター以来、資本家階級と上層中産階級は再び上昇を続け、その結果、下層中産〔小市民〕階級は、〈歴史〉に打撃を与えるこの周期的な災禍、〈歴史〉の大被害を自ら償つていると思ひ込む。それで下層中産階級は、その長所によつて自己を無産者階級から区別しなければならぬ。それゆゑサルトルは、彼が皮肉をこめてプチブルジョワ〔小市民〕の「イデオロギー的複合觀念〔感情〕」<sup>23)</sup>と名づけるものを構成する様々な特徴を、私たちに指摘する。つまり、プチブルたちが卑しくエリート〔上流階級〕と呼ぶものに対する目がくらむ怨恨、下層であるという明晰で苦い意識、この世の財産や不平等に対する両面価値的態度、歴史意識あるいは自

らの階級意識の完全な欠如、指導階級の大家たちとの周知の結託、献身的熱意、自己懲罰的貧苦と挫折行動。

ところで、『家の馬鹿息子』第三巻の「取り戻された読者」と題された節で、〈第二帝政〉の時代におけるフローベールの『ボヴァリー夫人』の成功の理由を探求しつつ、サルトルはその理由を「読者」の——作者のではない——ある社会階層の中に見出し、そしてその階層を「有識者」<sup>24)</sup>と規定することによって、彼らのイデオロギー的複合観念を特記する。彼によれば、神経症＝文学の事例において、作品によって規定される社会階層はもちろん、当時<sup>レ</sup>有<sup>識</sup>者<sup>と</sup>名づけられるものによって形成される<sup>中</sup>流<sup>階</sup>級<sup>の</sup>上<sup>層</sup>に他ならない。有能者たちは自由業を営み、彼らは医者、技師、建築家、弁護士、学者、教授、等である。今問題になっているのは、理論上は社会全体に関係するが、実際には所有階級に関係する諸々の目的のために、正確な知識を生産し、伝達し、もしくは利用する社会的諸個人なのである。一言でいえば、有能者<sup>た</sup>ち<sup>は</sup>とは実践的知の技術者である。彼らの雇用者は〈国家〉、つまり、おおよそ、支配階級の機関である。だが「これらの中途半端な金持ちたちはあらゆる政治生活から除外されている。」<sup>25)</sup> 彼らは職業を実行することで有利な就職斡旋を得られるが、それは彼らを巻き込んで地主の支配の正当化を余儀なくするには充分だが、彼らに投票権を与えるであろう二百フランの納税額への到達を可能にするには不十分なのである。そこから有能者たちの「イデオロギー的複合観念〔感情〕」が生じる。

有能者たちはある不快<sup>感</sup>に苦しむ。……大ブルジョワ階級の加担者であると同時に敵対者でもあり、その階級と自分たちを貴族の目で裁き、そして貴族たちを、彼らの勝者たる平民〔一般市民〕の目で裁いて、資本主義的支配の普遍性を知の普遍性——それなしにはこの支配は行われるまい——の名において糾弾し、金持ちの政治的知恵の証である彼の私利私欲に、金持ちになって統治することへの自分たちの権利を確立する無私無欲を対立させ、しかしながら、自分たちの無私無欲が欲得<sup>ず</sup>くであることを十分に知らないわけではないのが心配で、自分たちの仕事がすっかり破壊してしまうあまり説得力のない〈天地創造〉に他ならぬ全体性の亡霊——「すぐに蒸発して霧になる偽の館」（マラルメ『骰子の一擲』参照）——によって、彼らの分析の最深部にまでつきまとわれて、彼らはこの収支<sup>によ</sup>って、もう一つの全体主義的〔包括的〕——しかも非全体化する——過程であり、社会全体を破産させるおそれのある敵対力たる「〈資本〉の過程」を把握する、だがこれらの非人間的諸力の総合的な進展は理解できず……彼らは、ブルジョワ的多幸感にもかかわらず、そしてたぶんそのせいで、仮面をかぶった悲観主義の中に陥るのだが、その悲観主義の起源は、要するに、正確な知識のついに勝ち取られた自律性……この自律性が学者や技術者の職務は規定するが、彼らの社会的地位は不確定のままにしておく限りでの……なのだ。<sup>26)</sup>

私たちはそこから『〈未定稿〉＝マラルメ』において、サルトルは、中流階級の下層の出身であるプチブル作家たちのイデオロギー的複合感情の特徴を列挙しているが、それに反し『フローベ

ル論』では、彼は、中流階級の上層——大資本家と小市民のあいだの媒介——の出身である有能者＝読者たちのイデオロギー的複合感情を深く掘り下げている、だがこれら二つの複合感情には、両者ともに両義的で折衷的な社会的地位を象徴しているという共通性がある、と結論することができる。

しかも、『＜未定稿＞＝マラルメ』の中に、「純粹者たちの貴族階級」<sup>27)</sup> という自らの不可能な夢を語るプチブル詩人（フローベールの次の言葉を参照せよ。「他ならぬ我ら、芸術家、我らは＜神さま＞の貴族階級である。」<sup>28)</sup>）について、サルトルは鋭い洞察力でこう書いている。

そして彼が＜理想＞を本質的なもの、自分の＜自我＞を非本質的なものとみなす風を装って、＜絶対＞へと自己疎外するとき、彼は、不可視の＜資本＞へと永久に自己疎外した自分の両親に、さらに似てくるのだ<sup>29)</sup>

＜絶対＝芸術＞への疎外と＜資本＞への疎外が二つともに、本質的な＜理想＞への非本質的な＜自我＞の犠牲を表象する限りにおいて、両者間の類似が問題であるという事実だけによっても、『＜未定稿＞＝マラルメ』におけるやや意外なこの文章は、『フローベール論』第三巻における「取り戻された読者」の現象学的で歴史的な全記述を、すでに予告していると私たちには思われる。実際サルトルはそこで、ブルジョワ的覇権の道具としての「新ヒューマンイズム」を介して、＜人間的事象＞が、無限で実現不可能な＜理想＞へ非物質化される限りにおける「＜人間的事象＞——加工された物質、加工可能な物質——」<sup>30)</sup>への疎外に関する言説を、長々と展開している。一八四八年の＜二月革命＞（とりわけ六月の虐殺）と一八五一年＜十二月二日のクーデター＞が人間関係とブルジョワたちの階級意識を変質させてしまった以上、「新ヒューマンイズムの肯定的な役割は、人間を、その偉大さが犠牲の中に存する一存在と定義することであるにちがいない。その思考形態の倫理的基盤は、人間的企図の源泉と考えられた自己嫌悪になるだろう」。<sup>31)</sup> その結果、「科学主義的思考形態は、ブルジョワが他人たちや彼自身の許で人間に対して抱く憎しみを、＜理想＞への犠牲として提示することによって、品位の実践をすっかり変装させる」。<sup>32)</sup> サルトルはそこからこう結論する。

人間実在のこの憎悪のこもった非本質性は、当時、＜三位一体＞の形姿の＜理想＞として決定される。利益のための利益に対応するのは、＜科学＞のための＜科学＞と＜芸術＞のための＜芸術＞である。<sup>33)</sup>

ここで問題になっているのが＜理想＞への三重の疎外であることは、言うまでもない。＜資本＞への経営者の根本的疎外（＜利益＞への人間の犠牲）、＜科学〔学問〕＞への学者の疎外（＜知＞への人間の犠牲）、＜絶対＝芸術＞への作家の疎外（＜美＞への人間の犠牲）。換言すれば、資本主

義、科学主義、〈神経症＝芸術〉。

ところで『〈未定稿〉＝マラルメ』において、サルトルは、「怨恨の静寂主義」<sup>34)</sup>のしみ込んだ、プチブルの、一八五〇年の詩人たち——ボードレールの追随者——について、彼らは皆——実際の自殺への偏愛を表明しはしないが——生命より死の方を好んだ、と言う。彼らは事実、挫折と不平の否定的全範ちゅうを採用することによって、死の榮譽を競い合った（例えば、トリスタン・コルビュールの『黄色い恋』所収「墓碑銘」）。彼らはためらわずに、自分たちの人生も〈作品〉までもしくじった、と思い込んだ。彼らは自分たちの財力を超えた貴族の大饗宴を、〈現実〉の体系的否定によって置き換えた。だからサルトルは彼らについてこう書く。

軍人になれないので、一八五〇年の詩人たちは〈聖者〉になるだろう。産業・商業社会のただ中で、彼らは、消滅した共同体の今は亡き成員たちに、自分たちの葬送の長き夢とかつての狂気を映し出すだろう。<sup>35)</sup>

この文章を別の言葉で書き替えてみよう。

軍人になれないので、ポスト・ロマン派の作家たちは〈聖者〉になるだろう。ブルジョワ社会のただ中で、彼らは、難破した貴族階級の今は亡き兵士たちに対して、「死を賭した忠誠」を再現するだろう。<sup>36)</sup>

というのは一方で、『フローベール論』第三巻の「長兄たち」と題された章で、サルトルはこう言っているのだから。

文学の核心に、そのもっとも内奥の実質として、挫折をはじめて置いたのは……ロマン主義である。それでもこの挫折は、彼らのペンの下では、ポスト・ロマン派の難破の絶望的な黒さではない。それはそれが犠牲の羽毛〔文筆〕で身を飾っているからだ。……失われた大義に身を捧げること、その大義とともに身を滅ぼすのを受諾すること、それこそまさしく、原則としてブルジョワたちには拒まれた狂気的美徳である、寛容〔献身〕と呼ばれるものだ。<sup>37)</sup>

また他方で、第三巻の第二編「フローベールにおける神経症とプログラム作成」の中で、サルトルは次のように書いているのだから。

ルイ・ナポレオン〔ナポレオン三世〕はおそらくボナパルト〔十六世紀からコルシカ島に定住した、イタリア系のフランス皇帝一族の家系〕の一員ではなかろう。だが彼を取り巻く爵位を受けた軍人たち、彼らはナポレオン一世を取り巻いていた人々の現実のもしくは精神的な子孫たち

である。……フランスはその名誉——その軍事的名誉、と理解しよう——を取り戻した。そしてフローベールは、大公妃に勲章を授けられると、自分が「不名誉」だと感じるどころか、兵士たちの名誉にまで高められると思うのである。〈芸術〉への彼の忠誠は、兵士たちを通して、また彼らによって、死を賭した忠誠になる。あるいは、その方がよければ、戦場での敵の絶滅による死の贈与と、審美的態度の基盤としての死の観点のあいだには、親近性がある。そして〈帝政〉の美男の将校たち——彼らは死とともに、死のために、そして死によって生きている——の陰うつな傲慢さは、〈芸術家〉を構成する高慢な死後の存続〔不滅〕と、似ていなくもない。両者ともに自分たちをすでに故人とみなしている。<sup>38)</sup>

したがって、フローベールの自己犠牲〔献身〕は、軍隊において、〈皇帝〉への「死を賭した忠誠」による祖国への献身を表す「集団的葬礼の彼の中なる現存」<sup>39)</sup>に他ならない。だがその反面、〈生体験〉の静かな心の奥底では、彼は、支配者——時にはイジドール、バダンゲ〔ナポレオン三世のあだ名〕、そして時には〈皇帝〉——の教祖的な権力を受け入れようと否定しようとまったく自由なので、彼は〈聖者〉気取りである。

〈聖者〉は……すべてを越えて彼を連れ去る神秘的運動によって、この叙勲を超越することができると同時に、この上昇運動の時代による可能な唯一の認知として……それを受諾することもできる。<sup>40)</sup>

さらにサルトルは、『マラルメのアンガジュマン』において、一八五〇年の詩人たちについて興味深い指摘をしている。

言葉による〈存在〉全体の徹底的な異議申し立ては、そのうえ彼らの怨恨に奉仕するだろう。彼らはこの普遍的否定主義に一つの名を与えた。それが〈夢〉である。……〈夢〉、〈沈黙〉そして〈ふくれ面〉は互いに混同され、彼らの精神状態に対比しうるのは、錯乱的内容のない軽度の統合失調症のみであろう。<sup>41)</sup> (強調は引用者)。

ところで、〈夢〉と呼ばれるこの普遍的否定主義を、どう理解したらよいのか。私たちは、『存在と無』の続編をなす未完の哲学的テキスト、『倫理学ノート』（一九八三年）の中で、サルトルが〈夢〉を芸術創造の不可能性に関連づけていることを、承知している。彼によれば、芸術作品は、無化されて主題としてしか役立ちえない世界が、自由のもっとも典型的な行為〔創造〕によって完全に記憶に留められて、類同代理物を通して再創造される限りにおいて、一方では純粋な創作物として実現され、他方では、世界の純粋な再創造という行為は先験的に想像的世界、つまり虚無しか与えない限りにおいて、あらゆる絶対的創造の先験的な不可能性の証拠として実現される。それ



で以下は、一九四七、八年におけるサルトルの倫理＝哲学的言説の断章の一つである。

マラルメによって非常に強烈に感知された、この創造することの不可能性が、十九世紀の詩人たちが「夢」と呼ぶものの起源にある。「存在しないもの以外の何も美しくない」、なぜなら、文字通り、美（自由によって再創造された世界）は存在しないから。また、ボードレー尔的・マラルメ的〈不能性〉（神の死の結果）の感情の起源にもある。<sup>42)</sup>

同じ『ノート』の中でサルトルは、「芸術作品は創造の象徴である。だがもし神が死んだとすれば、創造の象徴であったものは、純粋な創作物にもなるが、同時に、創造は存在しえたかもしれないという印にもなる」<sup>43)</sup>と書いているので、結局、次の図式が問題となる。「神の死→芸術創造の不可能性→不能性＝〈夢〉」。しかしながら、一九五二年頃に書かれた『マラルメのアンガジュマン』の問題のくぐり（「怨恨＝〈夢〉による〈存在〉全体の徹底的異議申し立て→軽度の統合失調症」）は、『倫理学ノート』のこの視点をすでにのりこえており、そしてそれは相変わらず『家の馬鹿息子』第三巻の視点、とりわけヴェルストラーテン流に言えば、「不可能な文学への忠誠の可能性」<sup>44)</sup>としての「三つの神経症的特徴」の一つ、要するに、その実存的基盤における人間の挫折を、それが彼の芸術家的信念の本物性を保証する限りにおいて、予告しているように私たちには思われる。

サルトルによれば、中産階級の勝利以来——とりわけ一八五〇年頃——心ならずも単なる階級文学の職人にならずには芸術家になれないので、たった一つの解決策しかない。つまり社会のクズの中にしか存在可能な作家はいないということ。当時、物書きになりたい青年たちはこうして、次の相反する二つの恐れによってじらされる。つまり絶対的挫折を要求する文学的要請が彼らに抱かせる恐れ。彼らのしっかり安定した状況と、共同体から決して追放されないという彼らの憂うつな確信から来る、もう一つの恐れ。そこから彼らの態度を決定する緊張が由来する。すなわち挫折行動。これは二つの目標をもつ態度であり、その第一の表層的なものは、ある明確な目的に達すること、そしてその第二の深層的なものは、その目的を逃すことである。それゆえ以下は、芸術家になるための否定的諸条件である。

挫折行動は……現実的なものの絶えざる告発である……。この意味で、文学的要請が芸術家から求めるより複雑でより徹底的な行動、すなわち現実界全体との想像上の断絶（統合失調症のヒステリックな模倣）は、とてもびったり合ったこのズレ〔現状に疎いこと〕の中に、芸術家が非現実界に飛び込む……のを可能ならしめる……すばらしい跳躍台を見出すことができる。挫折行動はそれ自体によって、脱現実化〔現実感の喪失〕の絶え間のない糸口である。<sup>45)</sup>（強調は引用者）。

したがって、人間の挫折を概括する『フローベール論』のこのテキストは、『〈未定稿〉＝マラルメ』のテキストの進化および深化のように私たちには思われる。実際、「脱現実化＝挫折行動に

よる現実界全体との想像上の断絶は、「怨恨＝＜夢＞による＜存在＞全体の徹底的な異議申し立て」の言葉上の変形に他ならない。こうして私たちは、『マラルメのアンガジュマン』で問題になっている「＜夢＞」は、『家の馬鹿息子』で問題とされている「挫折行動」の詩的序曲を構成する、とすることができる。

事実それこそマラルメが、一八六三年六月三日にロンドンから友人のアンリ・カザリスに送った手紙の中で——「聖ペトロの否認」（『悪の華』参照）において、＜夢＞を＜行動＞に結びつけられないことを悔やんでいたボードレールを遠回しに皮肉りながら——別の言葉で言ったことである。

ある現代詩人の愚かさは、「＜行動＞が＜夢＞の姉妹でない」ことに困惑するほどだった。……いやはや、もし事情が別なら、もし＜夢＞がこうして新鮮さを奪われて品位を落とせば、いたい何処にわれわれは逃れようか、地上にうんざりして、隠れ家としては＜夢＞しか持たない、他ならぬ不幸なわれわれは。<sup>46)</sup>

現実界の全体的否定としての＜夢＞は、定義上現実の中で展開される＜行動＞とは無縁である以上、また＜夢＞は必然的に「挫折行動」の前触れとなる以上、詩人はそれを転倒して、絶望者にとっての価値＝隠れ家にする。こうした思想に基づいて、マラルメは小詩篇を作り、そしてそれを「＜窓＞」という題名で、この手紙に同封した。

私は逃れる、そしてすべてのガラス窓にしがみつく

それで人生には背を向ける、

.....

.....

私は姿を映して自分を天使と見る、そして私は死ぬ、そして私は

——窓ガラスよ芸術たれ、神秘的であれ——

自分の夢を王冠に戴いて、＜美＞が花咲く

以前の空に、再生したいのだ。<sup>47)</sup>

このようにして詩人は、「この世が支配者である」と知りながら、想像的、つまり不可能な＜理想＞＝＜美＞を夢みるのである。

いずれにせよ、ボードレールの追随者たるこれらの「夢想家たち」について、サルトルは『マラルメのアンガジュマン』で、彼らは自らの死後にしか終わることのないある社会的大悲劇の中に、彼らの全時代もるとも、漠然と自分たちが入り込んだと感じている、と書く。すなわち、「この時代はトンネルである」<sup>48)</sup>、と彼らの中の一人が言う。数ページ前で、サルトルは詩人たちのストライキについて語っていた。「一八六〇年から一九〇〇年まで、文学は沈黙のストライキをする。」<sup>49)</sup>

彼の言うところでは、〈十二月二日のクーデター〉以来、〈詩〉の中心地には、非宗教の帰結である時代の特徴としての全般的無力が幅をきかせる。数ページ後に、彼は〈詩〉の黙秘を述べるだろう。

ナポレオン三世の偽善的な独裁制の下、諸々の新聞は互いに検閲官になり、中産階級は自らの存在が露見することを恐れて黙りこみ、労働者たちは言論の自由を束縛される。つまり詩人たちは沈黙の<sup>こだま</sup>反響になる。<sup>50)</sup>

結局、これらの隠喩——トンネル、ストライキ、黙秘——を考慮すると、サルトルが、詩人と読者の間の共同体〔一致〕の消滅した諸条件に関するマラルメの省察を前提としていることは明白である。事実、『制限された行動』において、マラルメは彼の時代をトンネルにたとえている。「私たちはトンネル——時代——を通過しているのだ。それは最後を飾る、中央の純白の宮殿の全能の駅の手前で、町の中心地の下を這いつくばっている、長い、最後のトンネルだ。」<sup>51)</sup> 他の場所では、マラルメは空位期間について語るだろう。

実は私は現代を、そこに加わる必要のない詩人にとっての空位期間とみなしている。現代はあまりに回転の早い陳腐化〔老朽化〕状態にあり、また準備に沸き返っているので、詩人には、将来か他日をめざして神秘をもって仕事をし、そして時々、生者たちに自分の名刺、スタンス〔同型の詩節からなる悲劇的叙情詩〕かソネット〔十四行詩〕を送る以外にすべきことはない……<sup>52)</sup>

詩人と群衆のこの分離について、ポール・ベニシュウは彼の『マラルメと読者』の中で、適切な説明をしている。「詩人は、値打ちを下げたくなければ、自分と時代を分ける距離を保たなければならない、だが彼はひそかに、別の時代と別のさまざまな人間的調和を準備しているのだ。」<sup>53)</sup>

さて、『家の馬鹿息子』の第三巻において、作品の挫折を引き起こす文学史の枠組みについて論じながら、サルトルは、一八五〇年とその後の数十年間、作家とその読者の断絶は全くの単なる棄権として現れ、またマラルメが三十年間の文学史をもっとも見事に概括したと言い、彼は例として、一八九一年にジュール・ユレが行った、文学の進化に関するアンケートへのマラルメの回答から、数行を引いている。

詩は、人々がその観念を失ったように思われる栄光が、その位置を占めるであろう法治社会の豪華や至高の栄華のために作られている、と私は思う。社会の前で詩人がストライキをしている、今の時代のような時代における詩人の採るべき態度は、自分に提供されうるすべての腐敗した手段を、わきにのけることである。彼に提案されうるものはすべて、自分の構想や秘かな仕事より

劣っているのだ。<sup>54)</sup> (強調はサルトル)。

自らの貴族階級を認めてくれるような共同体がないので、詩人は自分の階級のために働くことを拒否する。だから彼は沈黙のストライキをする。しかしながら彼は、自分だけのために、ひそかに仕事をする。そして世紀末のこの言葉は、青年フローベールが世紀前半の終わりに書いていた次の言葉に対応する。

ぼくは自分のために、自分だけのために書くんだ、タバコを吸ったり眠ったりするようにね。これはほとんど動物的な働きさ、それほど個人的で内密なんだ。<sup>55)</sup>

それゆえ『フローベール論』の第三巻において、社会状況(勝ち誇る中産階級)と文学的諸要請(文学の自律性)との間の二律背反を指摘するのが目的の「情勢」——ポスト・ロマン派の歴史状況——と題された節で、サルトルが次のように書くのはもっともだ、と私たちには思われる。

フローベールからマラルメまで、すべての作家たちの内には、彼らが過渡期に生きており、たぶん将来は読者がよみがえるのを目撃するであろうという考えがあり、こうして彼らは何が<未来の芸術>になるのかを構想することさえできないとはいえ、<芸術のための芸術>という救済策は暫定的であるという考えがある。<sup>56)</sup>

事実、逆説的に、自らが非時間〔永遠〕的であろうとしたこれらのスト中の作家たちは、彼らの存命中に読まれた。それに、フローベールの刊行された処女作——もっとも過激で、もっとも暗い例の本、『ボヴァリー夫人』——は、大当たりによって、彼に直ちに栄光をもたらした。この事実から私たちは、<四八年六月〔の虐殺〕>と五一年<十二月二日のクーデター>を経験することによって、この作品の中に自分たちの姿を認めた多数の読者たちから構成される、ある一定の社会集団を想定することができる。それは「神経症=文章表現」が、芸術家の意に反して「神経症的読書」<sup>57)</sup>をもたらすからだ。サルトルはこうして「情勢」の展開から「取り戻された読書」の探求へと移行する。

さて、サルトルが『<未定稿>=マラルメ』で言うところでは、<旧体制>の貴族階級と来たるべき無産者階級との間の過渡的な階級である一八五〇年の中産階級は、ある長所によって自己を労働者たちから区別せねばならなかった。そして一八五〇年の詩人たちが彼らの力量を示したのは、文化的否定という手段で、この区別〔品位〕をわがものにするによってなのだ。<高踏派>から<象徴派>まで、彼らはそれで、所有階級がそれ自体について与えたい否定的イメージを、ただ崇高化するだけである。彼らはこうして小市民の自己嫌悪を具現する、だが彼らの否定は制限されている、その結果彼らはそれをもっぱら小売商に対してさし向けるが、自分たちの時代の経済を決め

る銀行家や大実業家に対してさし向けるわけではない。一言でいえば、ブルジョワ的観念は、彼らのペンの下、非時間〔永遠〕的なものになる。それでサルトルは、例としてフローベールの有名な一文を引用する。「私は下劣に考える者すべてをブルジョワと呼ぶ。」<sup>58)</sup> 私たちは、『家の馬鹿息子』第三巻の「長兄たち」と題された、つまりロマン派の章で、サルトルがフローベールの同じ文章をもっと巧みに皮肉っている、ということを知っている。

フローベールは、「私は下劣に考える者すべてをブルジョワと呼ぶ」と言っていた。ユゴー、彼なら言うかもしれない、「私は高貴に考える者すべてを貴族と呼ぶ」、と。<sup>59)</sup>

しかしながら、フローベールがこの警句で何を意味しているのか、またサルトルがそれについてどう思っているのかをよりよく理解するためには、私たちは、『家の馬鹿息子』第一巻の第七章「二つのイデオロギー」の中、「科学主義」に対する「もう一つのイデオロギー」と題された節を、参照するだけでよかろう。最初にサルトルは、ギュスターヴ・フローベールの時代の二つのイデオロギー——〈科学〉と〈信仰〉——を、フローベールが知覚し感じ取ることのすべてが刻印されに來る一種の腐植土と規定しており、この腐植土が各々の「体験」に、彼の個人的な風味を、要するに、彼の内的体験の不変の限定因のようなものを与えるのである。

とにかく、彼が何をしようと、彼の時代の二つのイデオロギーは彼の中に留まり続け、哀れなアントワヌの目の前で〈科学〉と〈信仰〉が互いに交えるこの怪しげな闘いに熱中するだろう。それらは思想ではなくて思想の母胎であり、感情ではなくて感情の図式である。<sup>60)</sup>

換言すれば、ここで問題となっているのは、「彼の内的空間の厳密な構造化」なのである。次に、フローベールの内的空間の一つの次元——高さと低さ——について論じながら、彼のよく知られた文をサルトルは引く。「卑劣さは下からの崇高さである。」そして彼はそれを注釈する。一方で崇高さは最高の頂上であり、そこからは宇宙全体が見える。他方で、努力やたぶん苦行、いずれにせよ一つの根本的な意図を想定させるものに、そこで到達することが必要である。つまり山頂はそれ自体では、純粹で惰性的な待機なのだ。こうした前置きの後、サルトルは再び言う。

崇高なもの、それは、一挙に……人間の条件から身を引き離して、そこ〔山頂〕にのぼる人間である。屈辱についても事情は同様だ。それは汚辱の中に埋もれることによって、人間的なものから抜け出る……悲しい勇気なのだ。つまり卑劣さは方向づけられており、見方によっては、そこには同じ努力が、すなわち私たち人類への同じ軽蔑と、もはや人間ではあるまいという根本的な意図とが再び見つかるのである。<sup>61)</sup>

要するに、「<高さ>と<低さ>のひそかな循環」があるのだ。この指摘に、サルトルは、人間以下の状態に落ちるといふ高慢な選択——一八四四年の転落——が到来するのは、ギュスターヴによれば、人間たち以上の高みに上ることの不可能性の認識の後で、ということに他ならない、と付言している。いずれにせよ、フローベールは屈辱的な潜水夫たちに、彼らが自分以外の他人であるにしても、自分の全好意を持ち続けるということに注意しよう。最後にサルトルは、『マラルメのアンガジューマン』の中で彼がすでに論じたフローベールの問題のテキストを、次のように掘り下げている。

それに対して、彼の軽蔑に値するもの、それは人類の最低段階に見出される自己満足的安定性である。「私は下劣に考える者すべてをブルジョワと呼ぶ。」<低さ〔下劣〕>は、ここではいささかも絶望によって求められてはいない。つまり人々がそこにいるということであり——しかもその上、もっと低いものもまだある。つまりブルジョワは人間であり、うぬぼれて、崇高なる卑劣さは軽蔑している。というのも低い所で気楽なのだ。卑劣さは<主人〔支配者〕>の無限の不在から生じた不満足のことだ。ところでブルジョワは満足している。だから彼を押しつぶし、その「至高点」が……依然としていつまでも無人のままである<天地創造>の巨大な梯子〔段階〕には盲目なのである。<sup>62)</sup>

換言すれば、

もし神が彼への特別のはからいで存在してくれたら、また父が愛されるがままになってくれたら、フローベールは彼自身よりもずっと上方に、天頂に、彼らを安置しただろうに。だが彼にはすべてが拒否されたし、彼は自分の社会的階級に閉じ込められているのだから、彼はそこに<下劣さ>を、「下劣に考える者すべて」に割り当てられる住み家を見る。ある見方では、彼はそこに根を下ろしている。別の見方では、その階級は彼の中で彼のブルジョワの本性的なものであり、私たちは、彼がそれを知らぬわけではない、と後に分かるだろう。それは狭量さであり、卑小さである。だがちゃんとそれを認めねばならないが、それが現実なのだ。彼は時おり心ひそかに思う。これが私の現実だ。<sup>63)</sup>

この事実から、サルトルは、それでもなお<低さ>へ向けての、つまり卑劣さへ向けてのホドロジ的の空間〔神経連結を研究する神経(病)学の用語で、距離と方向を含みうるような空間概念〕の構造化がある、と言う。人間以下の状態へ向けての人間以下への転落は、常時この身体の中に組み込まれていたのだ。彼の受動的素質構成はそれで、困惑していら立つと、失神への変遷の性向を通して現れる。ギュスターヴにとって、この五感の喪失は、人間の地位の放棄であり、物の地位の意図的採用である。『フィレンツェのペスト』（一八三六年）において、実際、ガルシアは気絶し、ゴ

ミのように掃除される。こいつはゴミである。それゆえ、「一八四四年に彼を地面に投げ倒す『神経性の発作』の原初的な意味、それは人間性以下への徹底的な、且つ同意した転落であるということだ。要するに、地面は彼の身体にとって、卑劣さの中に落ちる絶えざる勧誘を表しているのである。」<sup>64)</sup>したがって、主観的空間の下極限は、ギュスターヴにあっては、生体験の内在的限定因であると同時に、超越的世界との象徴的絆であることが分かる。彼はそれで自己であることを拒否する。それは、「自己とは、この青年にとっていささかも『個人的で肯定的な本質』ではないからである。それは彼の根本的次元、あるいはお望みなら、〈運命〉として生きられた彼の階級存在なのである。」<sup>65)</sup>要するに、この階級をギュスターヴは、彼の時代には不可能な階級脱落によって、拒否しようと努めるだろう。

それで『家の馬鹿息子』の深化したこの視点からすれば、『マラメルのアングジュマン』と『〈現代〉誌創刊の辞』におけるフローベールに対するサルトルの批評（「ブルジョワをあれほどのしり、社会機構から離れて、自分は隠遁したと思っていたフローベール、彼は私たちにあって、有能な金利生活者でなくして何なのか。」<sup>66)</sup>）は、むしろ表面的で手厳しいと私たちに思われる。\*

（しばた よしゆき・高崎経済大学地域政策学部教授）

〔註〕

- (1) J.-P. Sartre, "L'engagement de Mallarmé" in *OBLIQUES*(1979), p. 172.
- (2) *Ibid.*, p. 176.
- (3) J.-P. Sartre, *L'Idiot de la famille*, tome III, Gallimard, 1972, p. 223.
- (4) *Ibid.*, p. 226.
- (5) *Ibid.*, p. 271.
- (6) *Ibid.*, p. 264.
- (7) "L'engagement de Mallarmé" in *OBLIQUES*, p. 176.
- (8) *Ibid.*
- (9) *Ibid.*, p. 177.
- (10) *Ibid.*, p. 173.
- (11) *Ibid.*
- (12) *Ibid.*
- (13) *Ibid.*
- (14) *Ibid.*
- (15) *L'Idiot de la famille*, tome III, p. 251.
- (16) "L'engagement de Mallarmé" in *OBLIQUES*, p. 173.
- (17) *Ibid.*
- (18) *Ibid.*
- (19) *Ibid.*
- (20) *Ibid.*
- (21) *Ibid.*, p. 174.
- (22) *L'Idiot de la famille*, tome III, pp. 547-8.
- (23) "L'engagement de Mallarmé" in *OBLIQUES*, p. 174.
- (24) *L'Idiot de la famille*, tome III, p. 208.
- (25) *Ibid.*, p. 229.
- (26) *Ibid.*, pp. 238-9.
- (27) "L'engagement de Mallarmé" in *OBLIQUES*, p. 174.
- (28) *L'Idiot de la famille*, tome III, p. 112.
- (29) "L'engagement de Mallarmé" in *OBLIQUES*, p. 174.

- (30) *L'Idiot de la famille*, tome III, p. 292.
- (31) *Ibid.*, p. 245.
- (32) *Ibid.*, p. 284.
- (33) *Ibid.*, p. 289.
- (34) "L'engagement de Mallarmé" in *OBLIQUES*, p. 175.
- (35) *Ibid.*
- (36) *L'Idiot de la famille*, tome III, p. 122.
- (37) *Ibid.*, p. 121.
- (38) *Ibid.*, p. 564.
- (39) *Ibid.*, pp. 564-5.
- (40) *Ibid.*, pp. 565-6.
- (41) "L'engagement de Mallarmé" in *OBLIQUES*, p. 175.
- (42) J.-P. Sartre, *Cahiers pour une morale*, Ed. Gallimard, 1983, p. 463.
- (43) *Ibid.*, p. 462.
- (44) Pierre Verstraeten, "Sartre et son rapport à la névrose objective, III<sup>e</sup> tome" in *Autour de J.-P. Sartre*, Ed. Gallimard, 1981, p. 28.
- (45) *L'Idiot de la famille*, tome III, p. 176.
- (46) Stéphane Mallarmé, *correspondance(1862-1871)*, 1959 Librairie Gallimard, p. 90.
- (47) Mallarmé, "Les Fenêtres" in *Œuvres complètes*, Bibliothèque de la Pléiade, Ed. Gallimard, 1945, p. 33.
- (48) "L'engagement de Mallarmé" in *OBLIQUES*, p. 175.
- (49) *Ibid.*, p. 172.
- (50) *Ibid.*, p. 177.
- (51) Mallarmé, "L'Action restreinte" in *Œuvres complètes*, pp. 371-2.
- (52) Mallarmé, "Autobiographie" in *Œuvres complètes*, p. 664.
- (53) Paul Bénichou, "Mallarmé et le public" in *L'Ecrivain et ses travaux*, p. 82.
- (54) Cité par Sartre dans *L'Idiot de la famille*, tome III, p.195 ; Mallarmé, "Réponses à des enquêtes" in *Œuvres complètes*, pp. 869-70.
- (55) Gustave Flaubert, à Louise Colet, le 26 août 1847, *Correspondance*, Deuxième série, L. Conard, 1926, p. 40.
- (56) *L'Idiot de la famille*, tome III, p. 205.
- (57) *Ibid.*, p. 206.
- (58) Cité par Sartre dans "L'engagement de Mallarmé" in *OBLIQUES*, p. 177.
- (59) *L'Idiot de la famille*, tome III, p. 122.
- (60) *L'Idiot de la famille*, tome I, p. 588.
- (61) *Ibid.*, p. 589.
- (62) *Ibid.*, p. 590.
- (63) *Ibid.*, p. 592.
- (64) *Ibid.*, p. 593.
- (65) *Ibid.*, p.597.
- (66) Sartre, "Présentation des Temps Modernes" in *Situations*, II, p. 12.
- \* Cet article n'est qu'un second fragment du 4<sup>ième</sup> chapitre de la thèse de doctorat de III<sup>ième</sup> cycle sur J.-P. Sartre, présentée à l'Université de Provence en 1984.